
いちごみるく

描迷 氷菓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いちごみるく

【コード】
N3548N

【作者名】
描迷 氷菓

【あらすじ】
少年と少女の優柔不断なお話

桜が風に揺られて、ふわりふわりと宙を舞う。

僕は空を見上げ、ゆっくりと風に身を任せて舞っている桜の花びらを見ていた。

ふと、目線を戻すとヘッドフォンをして世界を拒絶している彼女がいた。

片手にはいちごミルク。いつもの彼女。

毎朝、人通りのないこの道を彼女と僕は歩いている。

君は知らないだろうけど、僕は君をずっと見ていたんだ。
ストーリーカーチックだけど、違うよ。

でも、僕はしゃべりかけようとはしない。
いや、しゃべりかけられなかった。

しゃべりかけたら、崩れてしまいそうでいやだった。
僕はいつも、斜め後ろから彼女を見ていたかった。

君は気づいていたはずだよ。
僕の存在に。

けど、君は僕を拒絶する。

世界と一緒に僕を拒絶する。

いちごミルクは受け入れているのに僕は受け入れてくれない。
どうして？

僕にはまだ、理解できないことだった。

彼女が右に曲がるのを僕はついていく。

その曲がり角を曲がると違う世界が広がる。

同じ制服を着た人たち。

ザワザワと少しうるさくなる道。

もう、ここは彼女と僕の道ではない。

それでも僕は斜め後ろからこっそり彼女のことを見る。

楽しい時間はすぐに過ぎる。というけれど

確かにそうだ。

ちなみに、僕は静かな時間もすぐに過ぎる気がする。

僕の静かな時間は楽しい時間と一緒になんだ。

いつしか彼女に聞いたことがあった。

「いちごミルクはおいしいの?」と。

そうしたら、彼女は

「君にはまだ、分からないかもね」と優しいな微笑みを添えて言った。

でも、僕は彼女のその微笑みは作り笑いだと感じた。

そして、僕は言ってしまったんだ。

「どうして、作り笑いするの?」

彼女の表情が驚きに変わった。

一度、溜息をついて返答した。

「それも、まだきつと分からないよ。君だから」

また作っている微笑みを添えて言った。

僕と彼女は登下校中は話さないけれど、昼休みによく話した。

登下校中は彼女は“拒絶”（ヘッドフォンをしていること）をしてるから話せなかった。

登下校中の彼女は、学校の彼女とは違った。

でも、僕はそれを聞くことはしなかった。

作り笑いのことを聞いた以来、そういうことを問うことができなくなってしまうた。

また彼女の作り笑いを見るのが怖かった。

僕はいつまでたっても彼女の中へ入ることができなかった。

教室で見る彼女は笑っていた。

笑っているけれど、悲しそうだった。

作り笑いでもないけれど、本当の笑顔ではなかった気がする。

これは僕の考えだから、あっているかは分からない。

彼女は一言で言うと“不思議”だった。

学校ではヘラヘラしてて、いつも笑っているのに

登下校中は“拒絶”をして無表情だ。

どっちの彼女の心は読めなかった。

そう考えるとまた、僕は少し虚しくなり、悔しくなる。

ある朝。

僕は登校中初めて、彼女に話しかけた。

学校はまだ始まっていないのに、すごく汗を掻いた気がする。

声で呼んでも“拒絶”してるので振り返らない。

だから、彼女の腕を引っ張った。

振り返った彼女の目は見開いていた。

ヘッドフォンをとって、彼女は小さく「何？」と言った。

「なんかあるの？」

無意識だった。

僕は彼女に変な質問を投げかけていた。

彼女は哑然として、1、2秒沈黙をおくと聞き返した。

「なにもないけど？どっかおかしい？」

やっぱり、僕は聞けなかった。

その朝、初めて彼女と並んで登校した。

けれど、やっぱり僕は聞けなくて彼女は優しく微笑むだけだった。

いつしか、僕等と一緒に登校するようになっていた。

毎朝、毎朝：

彼女が遅れたら、僕が待つ。

僕が遅れたら、彼女が待つ。

“拒絶”の彼女はいつしかいなくなり、けれど、作り笑いの彼女が増えていった。

そんな彼女でも、本当の笑みを浮かべるときがある。

ほんのちよつとだけれど、一瞬。

それを見抜けるようになった僕の成長は大きな成長だ。

そんな少し調子に乗っていたある日のこと。

彼女があまり笑わない日があった。

笑うとしても下手な愛想笑いですぐに俯く。

きつとなにかあったんだろう。

僕はそう思う。

聞いていいのか。
触れちゃいけないのか。
聞いたほうがいいのか。

僕の頭はそんな言葉がグルグルと回っていた。

けど、本当はそうじゃなかったのかもしれない。
ただ、僕には聞く勇気というものがなかったただけかも知れない。
いや、そうだな。勇気がないんだ。

毎日、毎日。

聞くチャンスがなかったんじゃない。

僕の聞く勇気がなかったんだ。

それを分かった僕。

けれど、分かったただけで聞けやしなかった。

いちごミルクのおいしさも、作り笑いする理由も分からないんだ。
そんな僕になにができるのだろう。
聞くこと以外になにがあったんだろう。

彼女を見てみると、ふてくされたようにいちごミルクを飲んでいた。

「ねえ、二宮……。」
「だったらもう、僕を捨ててしまおうと」
「あのさ。」
「彼女がこちらを見つめた。」
「なんか、あった？」
「どうせ、これだけの一言だ。」

「乙女の悩みよ」
「彼女らしくない一言だった。」

「そっか」
「期待はずれだったがしょうがないだろう。」

「悠輔」
「彼女が始めて僕の名前を呼んだ。」

ドキツとして、心臓が高鳴っているのが分かった。
それをばれないように、僕は返事をした。
「メアド、教えてくれない？」

次の日になって、彼女はいつもの場所に現れなかった。
遅刻ギリギリまで待っても現れなかった。
途方に暮れながら歩いていると、携帯がなった。

彼女だった。

「もしもし……」

『悠輔。私、引越すことになったから』

突然の知らせで僕は足を止めてしまった。
遅刻とかどうでもよくなった。
頭が真っ白になって、もう会えない。という単語だけが頭に浮かんだ。

「どうして」

『会いに行くからね』

「待って、今、どこにいるの」

僕は早口になっていた。

足が後ろへ下がったのが分かった。
走り出す寸前だった。

『もう、前の場所にはいないよ』

その言葉を聞いて、僕は無力になった気がした。
走る気力も、肩に力を入れることも、涙を抑える気持ちもなかった。
「俺は……二宮が好きだったんだ」

今まで、自分が確信持てなかったことを今、確信できた。
今まで、隠れていた心情が顔を出した。
今まで、彼女に問いたかったことが問える気がした。

「二宮は俺のこと、好きか？」

やっと、ずっと、聞けなかったことを聞いた。
その解をやっと、求めることができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3548n/>

いちごみるく

2011年2月3日11時32分発行